

72	戦後の教育改革……………	148
73	第五福竜丸事件と原水爆禁止運動……………	150
74	マリアナ海域の漁船大量遭難……………	152
75	カツオ・マグロ漁業の変貌と水産加工業……………	154
76	大量生産大量消費の時代……………	156
77	焼津市のベッドタウン化……………	158
78	総合開発計画の展開……………	160
79	ものづくり焼津の文化施設……………	162

**第7章 民俗**

80	海蔵寺ものがたり……………	164
81	焼津神社の荒祭り……………	166
82	絵馬に込めた願い……………	170
83	海・里・山の年中行事……………	172
84	暮らしのなかの石造物……………	174
85	恵まれた海の幸……………	176
86	焼津の伝説……………	178
87	山のなりわい……………	180
88	平野のなりわい……………	182
89	地先と川の漁具・漁法……………	184
90	港周辺の産業……………	186
91	カツオ一本釣漁船……………	188

**〈図説・年表の表記について〉**

- ・本文の記述は原則として常用漢字・現代仮名遣いを使用した。ただし、固有名称や特殊な用語については、必ずしもこの原則によらなかった。
- ・本文中の人名の敬称は、すべて省略した。
- ・年号は西暦を用い、必要に応じて日本年号を（ ）で示した。
- ・本文中の焼津市内の地名については、基本的には現在の住居表示にならふりがなを付した。
- ・市（国・県）指定文化財については、市（国・県）指定と省略した場合が多い。
- ・城之腰・北浜通（旧北新田）・鯛ヶ島については、歴史的経緯を考慮して便宜上「焼津湊三ヵ村」という総称、もしくは「浜通り」という通称を用いたところがある。
- ・本文の叙述には多くの研究成果を援用したが、本書の性質上、典拠を省略した場合が多い。
- ・掲載資料の所蔵者・提供者・撮影者については、巻末の一覧に記した。図・表の出典についてはそれぞれの説明文のなかに記した。
- ・一部、本文中の表現や引用した資料のなかに差別的な用語が使用されている場合がある。もとよりこうした不当な差別を容認するものではなく、差別根絶の立場からその事実を認識する意味で叙述・掲載をした。

92	鯉節製造技術の発達と職人の交流……………	190
93	思い出の水揚げ風景……………	192

**第8章 文化財**

94	焼津の神社……………	194
95	焼津の神社建築・民家・石造物……………	196
96	焼津の寺院……………	198
97	焼津の寺院建築……………	200
98	焼津の彫刻・絵画……………	202
99	焼津の工芸品・書跡・歴史資料……………	204
100	無形文化財・無形民俗文化財・天然記念物……………	206
●	昭和30年代 焼津 あのころの記憶……………	208
●	焼津市周辺地図……………	210
あとがき……………		212
執筆分担……………		213
掲載資料の所蔵者・提供者・撮影者一覧……………		214
協力者一覧……………		216
焼津市史編さん関係者名簿……………		217
焼津市歴史年表……………		1

# 海蔵寺ものがたり

「小川のお地藏さん」として親しまれる海蔵寺（焼津市東小川）は、焼津市外にも広く知られ、七月二三、二四日の縁日には大勢の参詣者で賑わう。本尊は一五〇〇年（明応九）に城之腰沖から上がったといわれ、海上安全の信仰を集めてきた。鰐口の緒や手水鉢には大きく「海上安全」と記され、本堂には小泉八雲「漂流」のモデルである甚助の板子や弁財船の模型が納められている。

一方で川除け・波除けのご利益もあるとされ、県中部の河川沿い・海岸沿いを中心に、海蔵寺から勧請されたと伝わる地藏が点在する。それらは「小川地藏」などと呼ばれ、海蔵寺本尊と同様、

片足だけを組んだ半跏踏み下げ坐像も多い。下江留（大井川町）では二〇〇七年（平成一九）まで、稲が大きく育つ夏から秋にかけての一〇〇日間は日参番の板を回覧し、当番が海蔵寺の方角を向いて拝んでいたという。この時期は台風が多く、洪水の被害がもつとも心配されたのであろう。駿府城主の後紀州藩主となった徳川頼宣以来あついで信仰を寄せた紀州徳川家のほか、多くの大名の支えもあつて海蔵寺は信仰圏を広めたと思われる。しかしそれ以前に、荒海で働く漁師たちや河川の水害に悩む人々にとって、海上安全と川除けがいかに切実な願いだったかが知れよう。



①初盆供養 初盆には死者の着物を納めて供養する。（焼津市東小川／海蔵寺）



②弁財船模型 1862年（文久2）、航海の安全を願い、焼津の海運業者によって奉納された。（焼津市東小川／海蔵寺）



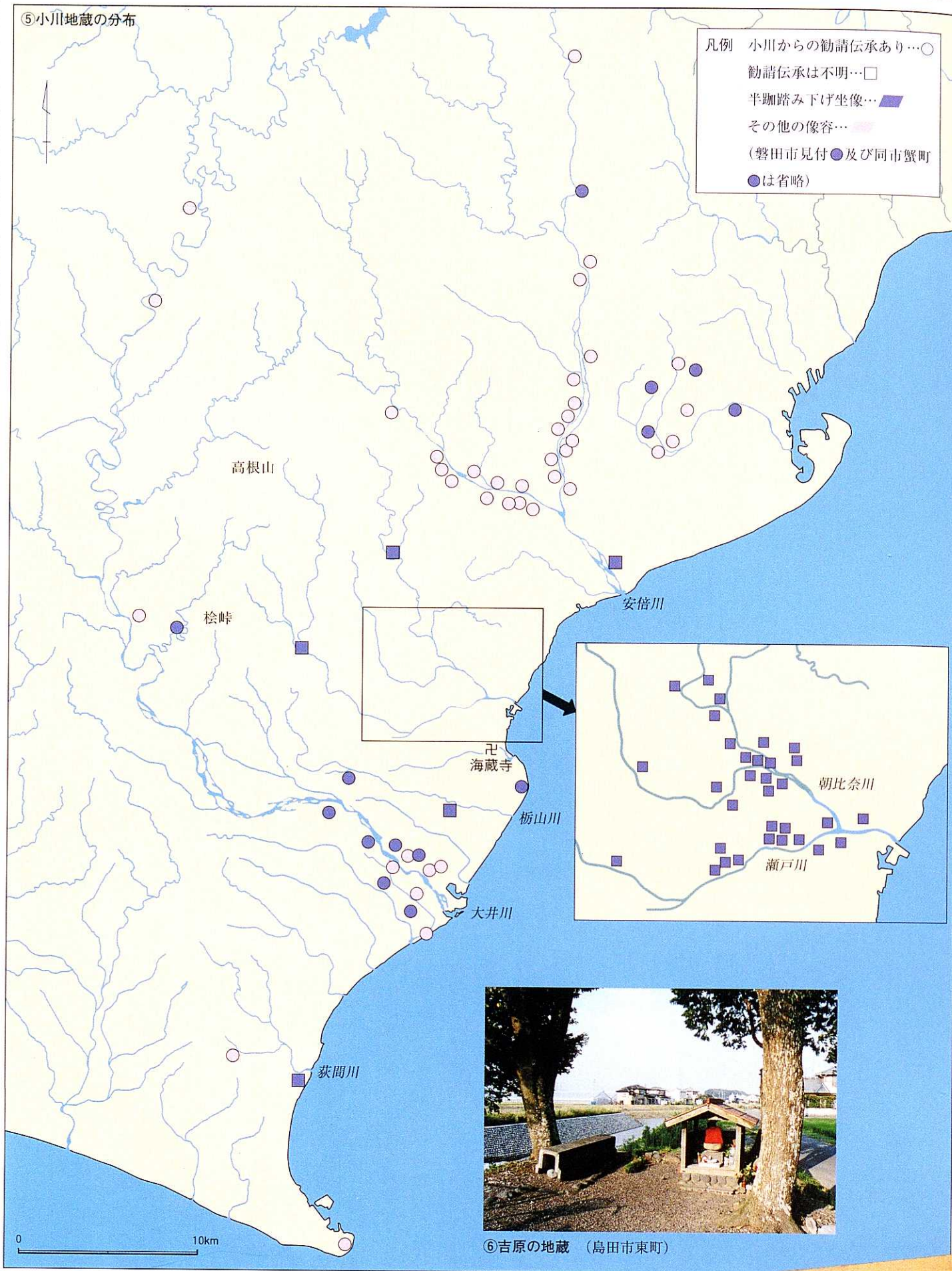
③海蔵寺本尊（右）と勧請された地藏（左、静岡市葵区横山）右手に錫杖、左手に宝珠を持ち、片足を組む姿はまったく同じ。



延命地藏大菩薩  
駿河國小川海蔵寺

## ⑤小川地藏の分布

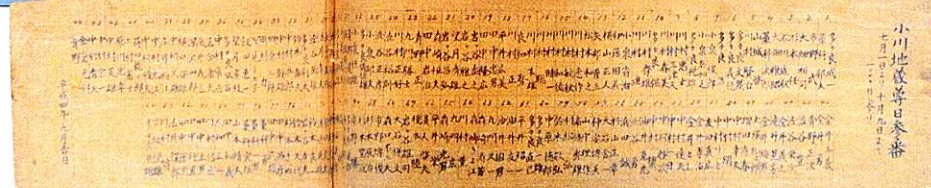
凡例 小川からの勧請伝承あり…○  
勧請伝承は不明…□  
半跏踏み下げ坐像…■  
その他の像容…●  
（磐田市見付●及び同市蟹町●は省略）



⑥吉原の地藏（島田市東町）

⑤安倍川・大井川の流域には、小川からの勧請伝承がある地藏、あるいは海蔵寺本尊と同じ姿の川除地藏が多数分布し、遠くは磐田市見付・同市蟹町にまで及ぶ。

④日参番の板 下江留では川除けとして勧請された地藏を祀るとともに、海蔵寺の方角を当番が拝んだ。（大井川町）



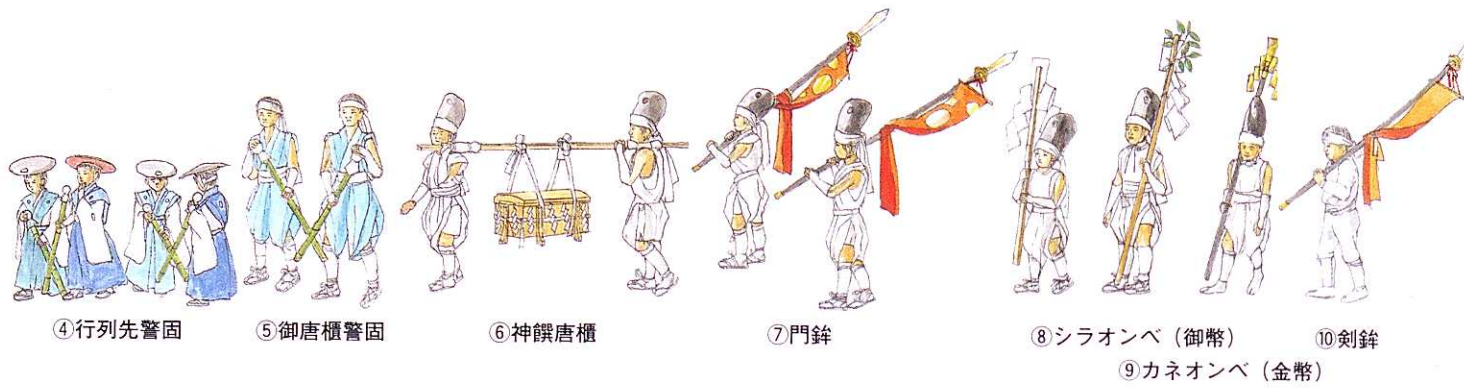


①太鼓

②獅子木遣り(雄)



③獅子木遣り(雌)



④行列先警固

⑤御唐櫃警固

⑥神饌唐櫃

⑦門鉦

⑧シラオンベ(御幣)

⑩剣鉦

⑨カネオンベ(金幣)



⑪四神

⑬御手箱

⑭柎鉦

⑯真榊

⑰一本御幣

⑱大神



⑪御鉢割

⑫御旗

⑬御鏡

⑭御櫃

⑮御弓

⑯御太刀

81 焼津神社の荒祭り

焼津神社では、夏に荒祭りと呼ばれる大祭が催される。焼津神社はかつて「入江大明神」とも呼ばれ、荒祭りも「イレンサン(入江さん)のお祭り」と呼ばれた。その氏子の地域は、神社周辺の焼津地区、漁師などが集住した駿河湾沿岸の浜通り地区とその周辺である。

八月一日には神社の注連縄を張り替えるお注連下し式が行われ、猿田彦役の青年は神社での参籠に入る。荒祭りは、八月一二、一三日である。一

二日には、氏子家族が子どもの名前入りの幟を担いで神社に参詣する幟かつぎと、赤子を神社役員二人が一人組となって頭と足を持ち上げ三回横転させる神ころがしの行事がある。夜には、厳肅な暗闇のなか御神楽祭という神事が行われる。

明けて一三日、早朝から神社を出発した神輿と渡御行列が、終日かけて氏子の地域を練り歩き、四つの御旅所をめぐる。行列の先頭は、県指定無形民俗文化財の獅子木遣りである。神輿は興昇(コシカケともいう)の若者達が威勢よく担ぎ上げ、勇壮な「アンエットン」の掛声が焼津の街に終日響く。浜通り地区の北御旅所では櫛形餅などの特殊な神饌が供えられ、深夜の渡御となる焼津御旅所では流鏝馬と御神子の神事が行われる。



②猿田彦



④オンシンサイリン (御神祭礼)



⑤御神楽



⑥二本御幣



⑦オンベツキ



⑧笛役警固



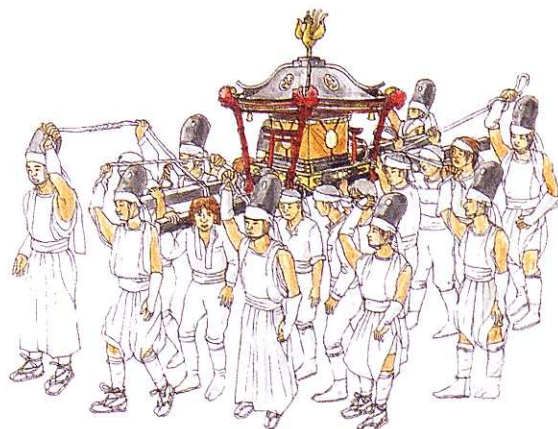
⑨御笛



⑩笛役警固



⑩輿付警固



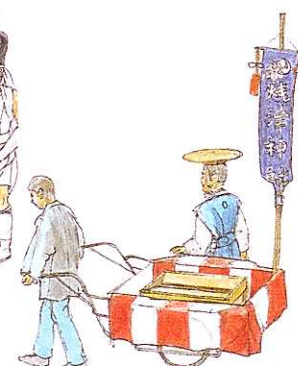
⑫サキゴシ (前神輿) と輿舁



⑬輿付警固



⑭アトゴシ (後神輿) と輿舁



⑮塞銭箱



⑯神社総代



⑰神職



⑱イチッコ (御神子)



⑲オンクササゲ (御供捧)



⑳ヤブサメ (流鏝馬)

### 荒祭り四大神役

四大神役 (祭りの重要な役) とされるのが猿田彦 (②)・御神子 (⑱)・御供捧 (⑲)・流鏝馬 (⑳) である。

**猿田彦** 面をつけるため通称オメンサンという。祭りの間は猿田彦役の青年は神になるといわれる。行列の先払いを務める。

**御神子** 祭りの間、足を不浄な地に着けない聖なる役。おそらく本来は巫女であったと思われる。

**御供捧** 焼津神社の祭神日本武尊が漂着した場所だといふ北御旅所で、渡御した神輿に数々の特殊な神饌を供える。

**流鏝馬** 少年の役。焼津御旅所前で、矢を的に投げつける方法での流鏝馬を行う。この矢を拾うと縁起がよいという。

\* 番号の順に行列が進む。

\* この図は2003年 (平成15) 夏の祭礼をもとに作成した。

絵馬は、本来は生きた馬を神に奉納したものが、その代わりに板に馬の絵を描くようになったものが起源とされる。やがて馬に限らず、歌舞伎の一場面、龍虎などの古典的な図柄に加え、近代になってからは戦争に関するものも登場する。絵馬には、願い事、誓願、感謝など、さまざまな思いが込められている。海にかかわる焼津神社にもかつては船の絵馬があったが、年月による損傷など

から現在はみることができない。那閉神社に奉納された大正期の漁船絵馬とほぼ同じものが三重県の青峯山正福寺にも奉納されている。船の絵馬は近代では新造時の写真に代わった。花沢の法華寺、東小川（こがわ）の海蔵寺（かいぞうじ）には善光寺や成田山などの霊場めぐりを記念した絵馬が比較的まとまって残されている。  
 おおしま 大島の洞福寺（とうふくじ）にある「子返しの絵馬」は、いわゆる間引きの場面を描いている。志太地区ではこれが唯一のものである。また海蔵寺には、伊豆の長八と並ぶ漆喰画の名手とされる森田鶴堂（もりたかくどう）（一八五七―一九三四）が一八九九年（明治三二）に描いた絵馬が一点ある。鶴堂は静岡市にあった蓬萊楼に多くの作品を描いたことで知られる。



①赤馬の絵馬 背景に金箔が残る。裏面に「駿州益頭郡花沢村 観世音 寶前 法華寺」と墨書。(焼津市花沢/法華寺)



⑤参拝記念絵馬 (部分) (焼津市花沢/法華寺)



②漆喰絵馬 静岡の漆喰工芸の名人、森田鶴堂の1899年（明治32）の作品。額の右側に「静岡市貸座敷中 引手茶屋中 芸妓中」、左側に「世話人」として関本為吉ら5人の名がみえる。(焼津市東小川/海蔵寺)



⑥参拝記念絵馬 善光寺、成田山、日光などに参拝した記念の絵馬 (焼津市東小川/海蔵寺)。ほとんどが女性の集団である。この3枚は明治時代のものだが、⑤は1862年（文久2）の旅姿。そのころの笠が明治には洋傘にかわっている。



④戦争絵馬 1892年（明治25）に歩兵第十八連隊の有志によって奉納されたもので、横幅が2m近くある市内屈指の大絵馬。「陸海軍総合大演習之図」と題され、陸軍の攻城戦の様子が描かれている。(焼津市保福島/大井神社)



③八千代丸の絵馬 那閉神社 (焼津市浜当目) に奉納された大正初期のカツオ船絵馬。



⑦子返しの絵馬 赤ん坊の命を絶つ間引きのことを、子返しもいった。これは間引きをする母親の影が恐ろしい鬼になっていることを示して間引きをいさめるもの。周防国（山口県）から来て大島に居着いた弥吉という人物が奉納した。(焼津市大島/洞福寺)

焼津の村々は海に面した漁村ないし半農半漁の集落、大井川と瀬戸川の下流部に発達した水田中心の集落、高草山の山麓に点在する山付きの集落という、三つのタイプに分類される。豊作・豊漁と一年の無事を祈る年中行事にも、こうした地域の特性が表れている。山沿いの村々では、背後の山での生業の無事を祈る山の神の祭りが盛んであった。たとえば、関方せきがたの山の神祭りは、ジャタイと呼ぶ巨大な藁の籠を山の中腹の岩場に運び、里に向かって大きな矢を投げる。海に生活をかける船元の家では、新年を迎える神棚にカツオを供えて豊漁を祈った。また、瀬戸川や栃山川に沿った村々および海岸に面した半農半漁の村では、盆に大きなトーロンを立て、束ねた松の根に火をつけて投げ上げ、夜空を焦がすトーロンの炎を見上げて祖先の霊を送る。もちろん地域を越えて共通する行事も多い。焼津市民が一年という時間にとどのような節目をつけて過ごしていたのかを、年中行事がはつきりとみせてくれる。



④虚空蔵さんの縁日 縁日のダルマ市には近郷近村から多くの参拝者が詰めかける。2月13日を「送りダルマ」23日を「迎えダルマ」ともいう。(焼津市浜当日)



②元旦の焼津漁港小川地区 大漁旗を掲げた漁船の向こうには富士山が見える。

⑤ナダマサン(浦神社)の祭礼 7月26日の祭礼には小さな船を海に流して、港や船の安全を祈願する。(焼津市新屋)



①船元家のショガツオ 心臓以外の内臓をとり、10日間ほど塩漬けにしたカツオに注連縄を通す。暮れの30日から正月7日まで飾る。(焼津市鯛ヶ島)



⑥お節句の草雛 ヤブカンゾウの葉にさまざまな花を織りこんだものを楊枝でとめ、十二単をまとったダイリンサン(内裏様)として雛壇に飾った。(焼津市大住)



③タウチコー(春田打ち) 1月11日の未明、田を鋤でうない、家の男1人につき3本ずつヤナギの枝を立て、餅などを供えて1年の豊作を祈る。(焼津市中里)



⑦関方の山の神祭り(市指定文化財) 藁で作られたジャタイと呼ばれる籠を麓から運び、祭祀場所に据える(右上)。その後、崖の縁から谷底に向かって竹の矢を射る(実際には投げない)。(焼津市関方)



⑧盆のトーロン 竹やゴ(松葉)で作った大きなトーロンに、子どもたちが下から松明を放り投げて点火する。かつては、ほとんどの村の海岸や河原で行われていたが、今では田尻北地区のみとなった。(焼津市田尻北)

# 暮らしのなかの石造物

瀬戸川の土手を歩くと、川除地蔵(⑥)を多く見かける。大井川の氾濫原に位置し、海に面して瀬戸川・栃山川などの河口をもつ焼津市は、海や川の恵みを楽しむと同時に、高潮や洪水の被害に悩まされてもきた。その災害を避けようと川除・波除地蔵が多く建立され、現在でも人々の暮らしを見守っている。



①アマリューサン 自然石に「水分大神」と彫られ、法華寺裏山の稜線上に建つ。井戸のない花沢の水源地を司る神とされる。(焼津市花沢)

海や川には色々な供養碑もある。浜当目の「亀の墓」(⑤)は、海岸にあがった亀を丁寧(はまらうめ)に葬つたものである。沖でも網にかかった亀には酒を飲ませて帰したり、亀が寄り付く流木を「亀の枕木」と呼んで大漁の吉兆としたりと、亀は特別な存在であった。また、志太地域に濃密に分布する流行(はやり)神、八兵衛碑(⑦)も川沿いに建てられているこ



②道標 日本坂を越えて府中(駿府)に至る道と、廻沢(岡部町)を経て宇津ノ谷の慶龍寺(静岡市駿河区)に至る道との分岐点を示す。1702年(元禄15)建立。(焼津市花沢)

とが多く、市域に二二基が確認されている。石造物は生活のなかでも利用されてきた。辻に建つ道標はその道を古くから大勢の人が通行してきたことを物語る。たとえば花沢と小坂(静岡市駿河区)の間の峠道は古代東海道の日本坂として知られ、その入り口にあたる法華寺門前に道標(②)が建つ。また小浜の尾根にある道標は駿府の豪商の砂張屋が一八二七年(文政一〇)に建てたもので、今ではハイキングコースとなった山道も当時は重要な交易ルートだったことがわかる。



③万人供養塔 海蔵寺に死者の着物を納める初盆供養が1万人に達した碑。1930年(昭和5)建立。(焼津市東小川/海蔵寺)



⑥川除地蔵 1861年(文久元)6月建立。川除地蔵の多さはかつての深刻な洪水被害を物語る。(焼津市保福島)



④報恩の三毛猫 長く可愛がられた猫が病気に効く水鳥を捕らえてきた、という伝説に基づく。「大正14年1月23日」とある。(焼津市中根)



⑤亀の墓 1987年(昭和62)頃造られたもの。浜当目の浜が広がったころにはたくさんの亀が産卵に上がった。(焼津市浜当日)



⑦八兵衛さん 1923年(大正12)建立。盆に唱えるオショージャも各地に似通ったものが残る。(焼津市大島)



⑨筆子塚 寺子屋の師匠を筆子(弟子)たちが供養。(焼津市大覚寺/全珠院)



⑧西国三十三観音 1801年(享和元)に石脇及び近隣の篤志家が先祖供養のために建立した。(焼津市石脇下/宝積寺)

焼津はカツオの町であった。江戸時代から八丁槽の大型漁船を漕ぎ出し、駿河湾でカツオをとった。その伝統を受け、漁船の動力化、漁場の開発などに加え、鯉節生産においても、焼津は近代カツオ産業をリードしてきた。

カツオは夏の魚である。今と違って、初夏から秋までを漁期とするカツオ漁を代表作といい、冬季のサバ漁を裏作とといった。それによって乗組員は通年の仕事を確保できた。また近海での小漁も盛んに行われ、多様な魚種を素材にした焼津ならではの食べ方や食品が作り出された。鯉節製造過程で、脂肪分が多いために切り落とされるハラモと呼ばれる部分の焼き物の濃厚な味わいや、ヘソと俗称される心臓の独特の歯ざわりは、焼津ならではのカツオ料理である。またイワシなどの小魚を原料にしたハンベ（黒はんぺん）は、静岡のおでんにはなくてはならない素材となった。身近な鮮魚や加工品をいかした魚づくしの焼津の素朴な食卓は、季節の彩りにあふれている。



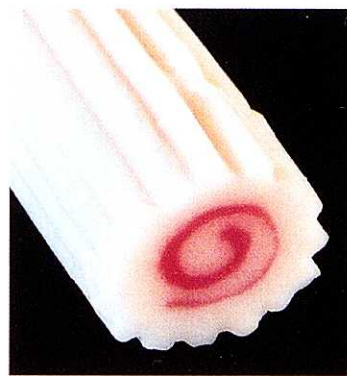
①カツオのヘソ 味噌煮



②カツオ料理あれこれ 上段左より時計回りに、アラの味噌汁/タタキ/ヘソ2種（味噌煮と塩焼き）/カツオの茶漬け（カツーチヤ）/酒盗/刺身/角煮/ハラモ焼き。



③飾りかまぼこ



④なると



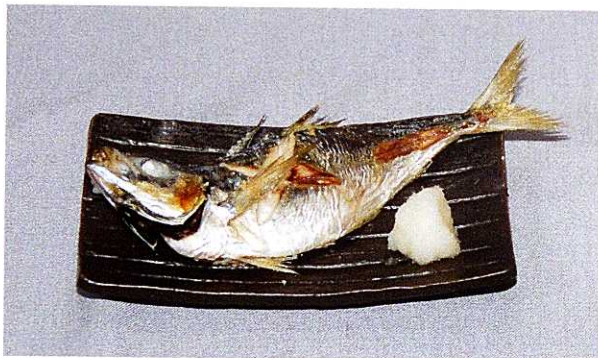
⑤シメサバ



⑧甲板上での食事風景



⑨ハンベ（黒はんぺん）



⑩アジの塩焼き



⑥とれたてのサバの輝き



⑦サバの塩焼き



⑪子どもたちに愛される焼津のおでん 町なかのおでんやさんは、子どもたちの憩いの場。たっぷり煮込んだハンベ（黒はんぺん）などの練り製品が焼津おでんの定番である。（焼津市栄町）



日本武尊に関する伝説と徳川家康の伝説は市内各地にあり、焼津市の代表的な伝説である。日本武尊の伝説は焼津神社との関係が深いのが特徴である。家康の伝説は、家康を助けて姓を与えられた話、八丁櫓の船の特権、石に対する信仰と結びついた旗掛石など多様である。また徳川家を支えた有力武将、井伊直孝が産湯を使ったという井戸のほか、戦国時代の伝説も数多く伝えられている。津波に関する伝説が多いのも特徴である。予言に従って移転して津波の難を逃れた林叟院に関するものもつと有名だが、波除地藏の伝説、津波に関する地名や津波にともなう漂着物の伝説などがある。

中国大陸での戦火が拡大していた一九三四年（昭和九）から三九年にかけて、帝国在郷軍人会（昭和三）から三九年にかけて、帝国在郷軍人会小川村分会が、『小川の流』という雑誌をほぼ月刊で発行していた。戦地にいる郷土の兵士の慰問のためにつくられた雑誌である。このなかには、小川村の伝説をはじめとしてみざまな民話が紹介されている。どの号もガリ版印刷で独特の味わいがある。郷土の民話がこうした形で紹介される例は貴重である。



①罪切地藏尊 一説には、武田の軍勢に追われた家康を、ある僧が助けた。後に家康が、その僧に名剣を授けて寺を建てた。名剣を祀ったのが罪切地藏尊という。（焼津市栄町）



②守屋家の由来碑 家康が武田信玄との戦いに敗れて逃げる際、瀬戸川を渡るのを助けたことにより守屋の姓を与えられたという。（焼津市浜当日／弘徳院）



③旗掛石 石脇下の浅間神社のすぐ前にある。家康が旗を掛けたといわれる。もとは、浅間神社の磐座だったと思われる。年2回、注連縄が張り替えられる。（焼津市石脇下）



⑤鳴子の松（1974年頃） 1699年（元禄12）、大津波を逃れた人々が松に登った様子が鳴子のように見えた。以来その松は鳴子の松と呼ばれた。写真は2代目の松で、現在の松は3代目である。（焼津市石津）



④井伊直孝産湯の井戸 徳川家康に重用された井伊直孝は、この村松五郎右衛門家で生まれたという。村松家の旧宅地とされる所に産湯の井戸がある。（焼津市中里）

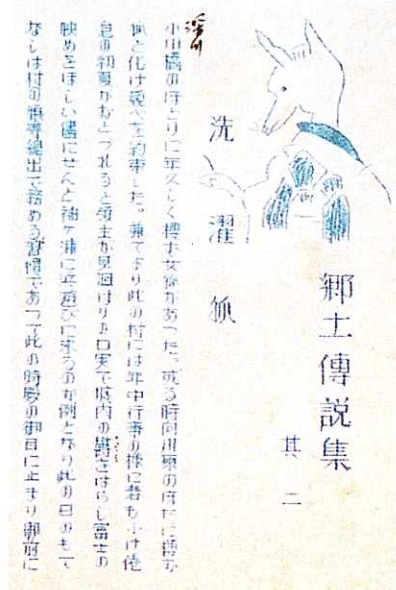


⑧波除地藏 大きな波がきたとき、白い衣を着た3体の地藏様が両手を広げて波を静めたという。（焼津市田尻北）



⑥現在の林叟院（焼津市坂本）

⑦林叟院草創之地の碑 1469年（明応6）に小川にあった林叟院を異相の老人が訪れて、寺を移すようにいう。そのとおりにすると、翌年の津波で林叟院の跡は海に沈んでしまう。（焼津市小川）



⑨雑誌『小川の流』 帝国在郷軍人会小川村分会が出征兵士のために発行した雑誌。村の動静のほかに郷土の民話も紹介された。

# 山のなりわい

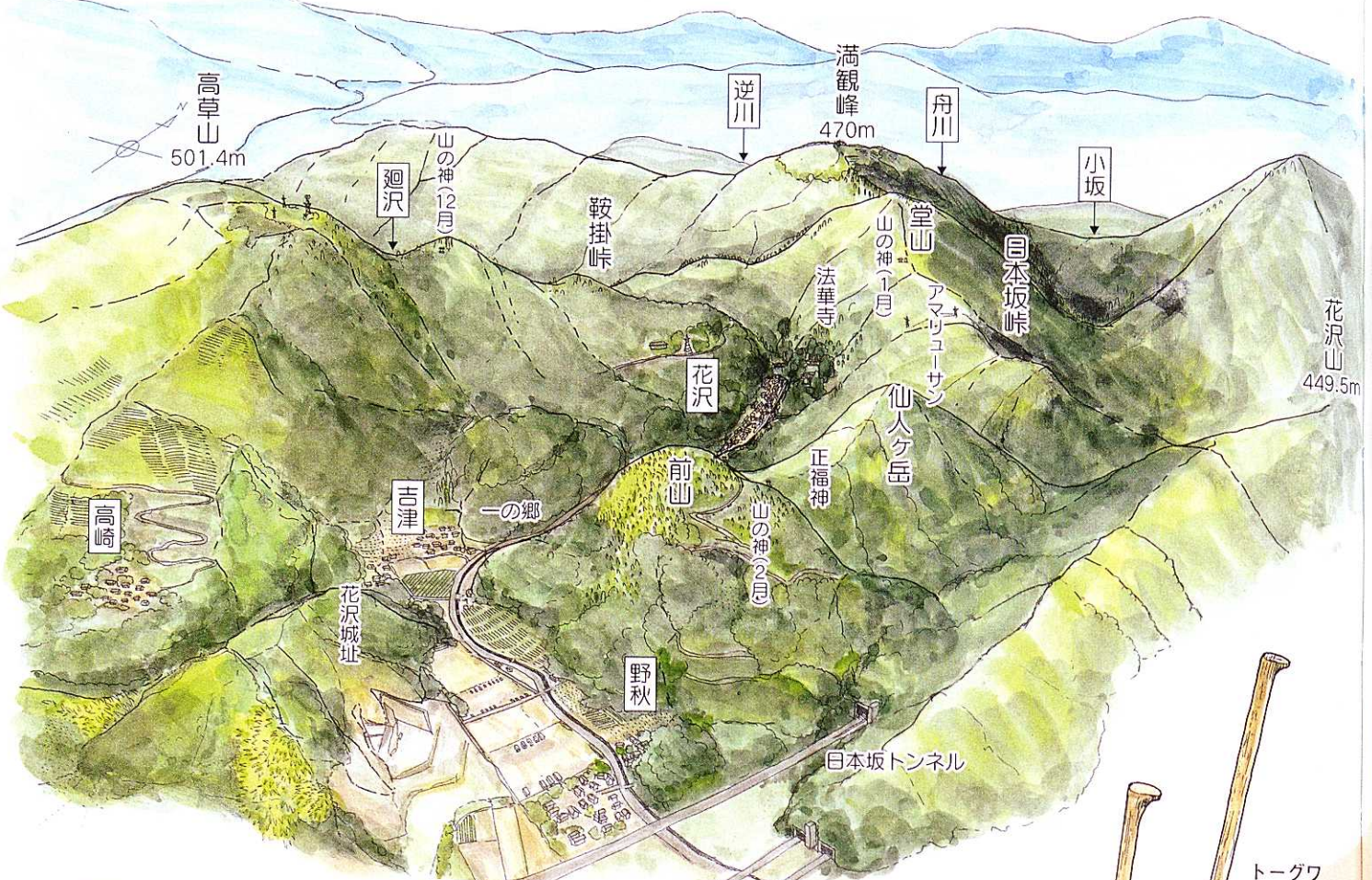
高草山(五〇一・四四)を中心に、花沢山(四四九・五五)や満観峰(四七〇四)、日本坂峠など低山の連なる市域の北部は、傾斜地を利用してミカンやお茶の栽培をなりわいにしてきた。

古くは山林伐採後の焼畑(蕎麦を収穫するのでソバヤマともいう)も行われ、紙の原料になる三椏の栽培、そして毒苳(アブラギリ、実から油を搾る)や薪などの自然物採取も盛んであった。

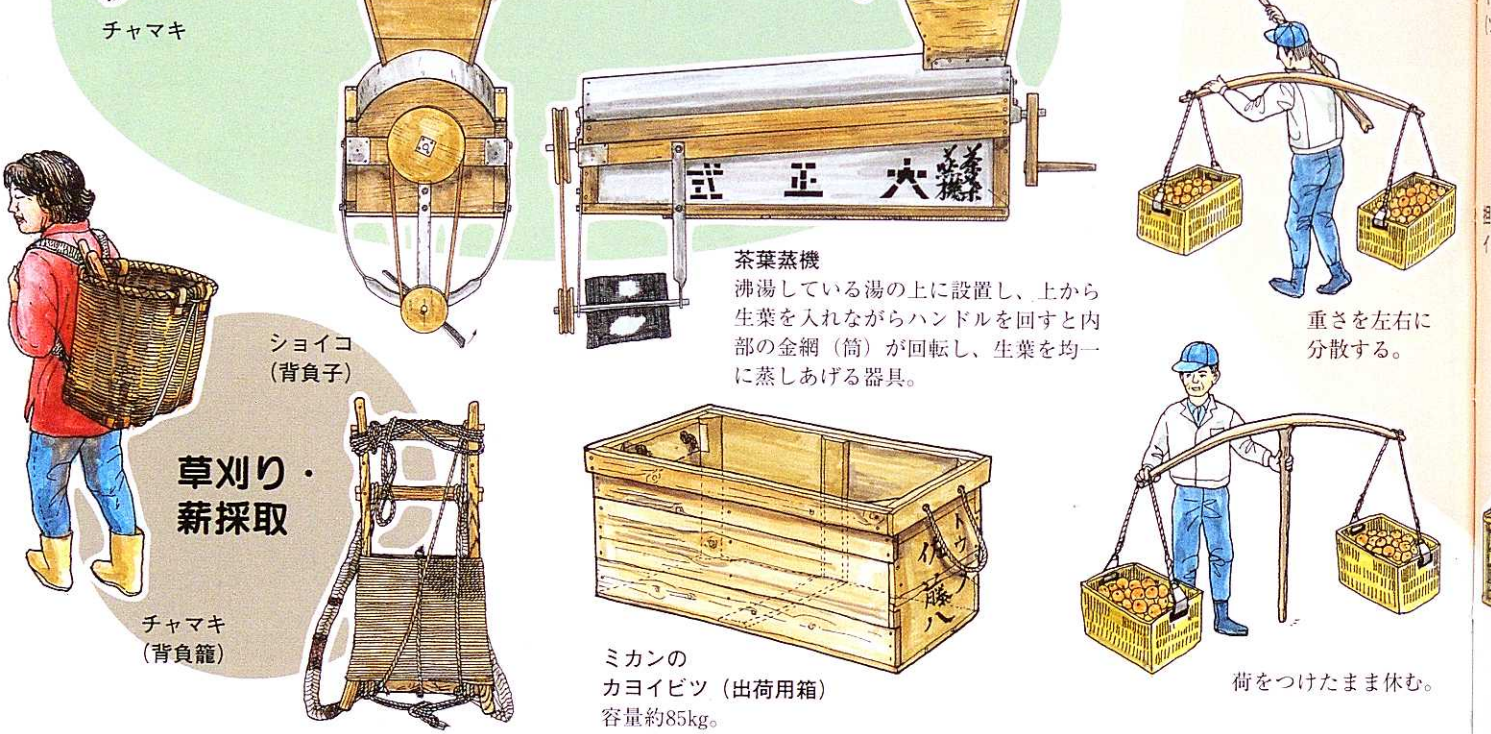
茶は、急峻な傾斜地の土止めにもなった。標高が高いために春先に霜が降りるような茶原では、二番茶の時期でも新茶の時期に近い低温で下で摘みとりが始まる。そのため、とくに高草山の山頂近くの茶は品質がよいといわれた。また、製茶の際に茶揉みの燃料となる炭も大量に必要とされたので、花沢では炭焼きも行われた。

一方、山の中腹には石積みの段々畑であるミカンバラ(蜜柑原)が広がる。ここは明治期以降に開墾された。一九六〇年頃になると、ミカンの値が上がり「黄金のダイヤ」といわれるほどの好景氣を迎えた。この地がミカン栽培に適していたのは、日当たりがよく水はけのよい土壌に加え、斜面温暖帯といって、駿河湾で温暖られた空気が逆転しながら山の中腹に停滞し、温暖な空気の層をつくり出すという特有の現象が生じるためである。

## 花沢周辺俯瞰図



### 茶刈り・製茶用具



### 草刈り・薪採取



### ミカン栽培用具



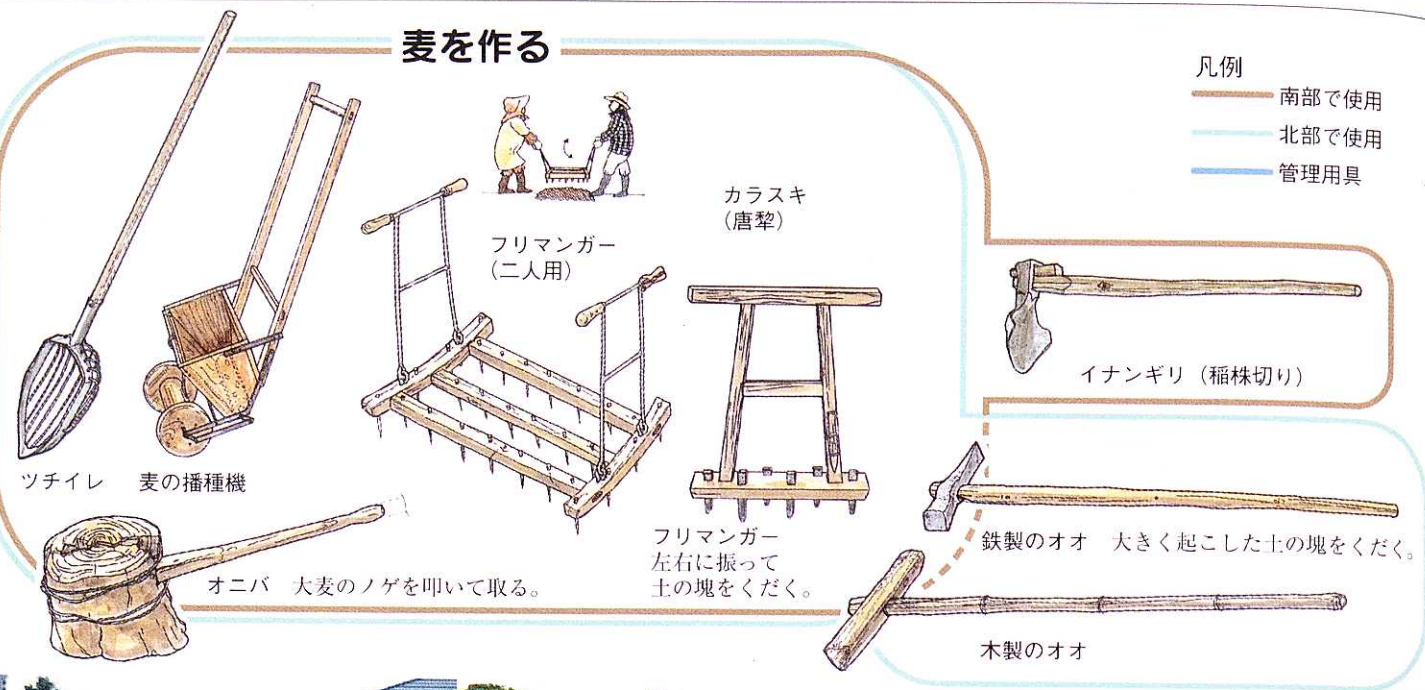
大井川をはじめ、栃山川、瀬戸川、朝比奈川などの河川によって形成された市域の平野部は、豊富な水を利用して水田が拓かれ、米作りをなりわいの第一にしてきたところである。そして、稲刈り後の乾田では、土を起こしなおして畑に作り替え、裏作に麦や菜種を蒔いた。

とくに米作りが盛んな地域のことを「田場所」「田どころ」などといい、おもに市域南部を指す。ここはもとは大井川の氾濫原であったため米作りができなかった地域であるが、近世初頭、治水が完備されると、多くの人の手で大規模な新田開発が行われた。それ以後、広大な水田地帯が出現し、志太平洋野は穀倉地帯として知られるようになった。平野のなりわいに欠かせなかった米作りと麦作りの農具を概観してみる。農機具屋を通して入手されたものにも地域性はあり、とくに土壌を反映する鍬はそれが色濃く現れる農具の一つである。米作りの環境は、「土」に集約されるといってもよいだろう。

土を手にする人々は、ガラマ（砂礫土）とツチマ（肥沃な砂壤土）、バネ（青味がかった粘土）など土の性質をこのような言葉で認識する。ガラマとツチマが混在するのは南部、水を通しにくい硬いバネは、北部を代表する土壌である。

麦を作る

凡例  
 南部で使用  
 北部で使用  
 管理用具



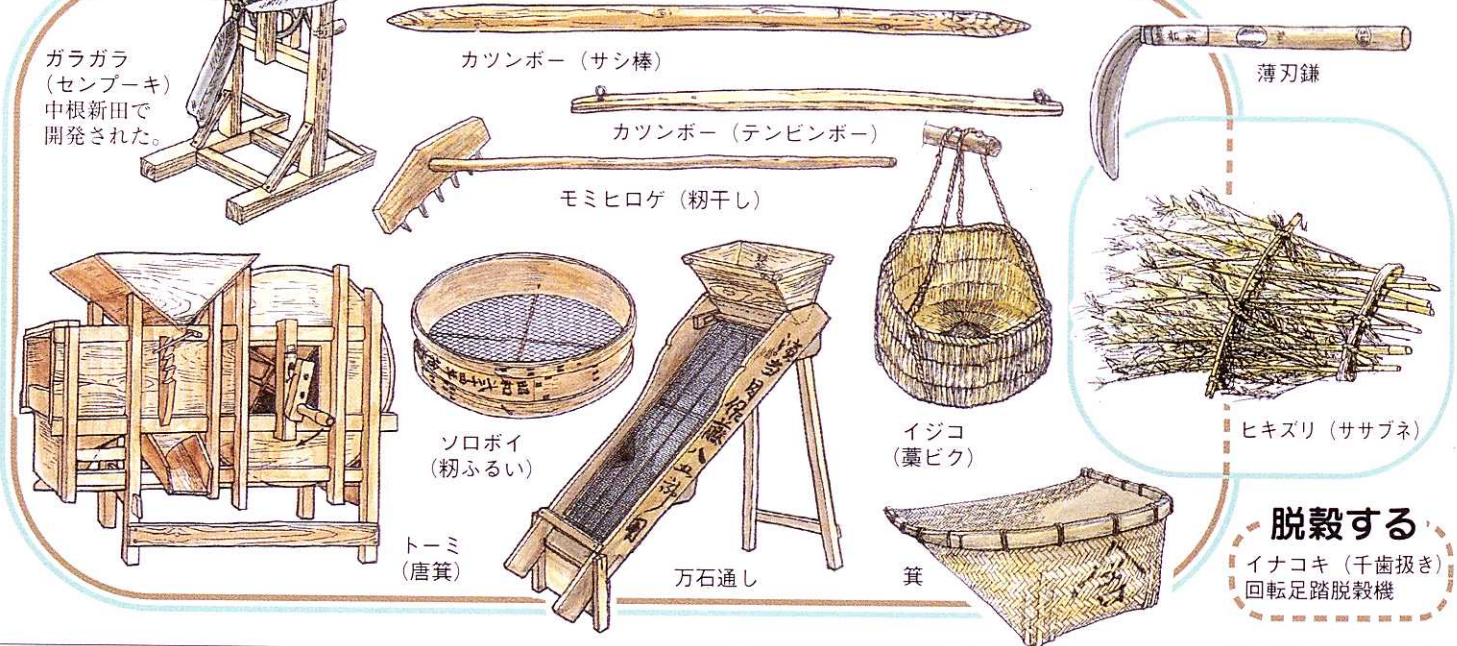
南部で使われた鍬の例



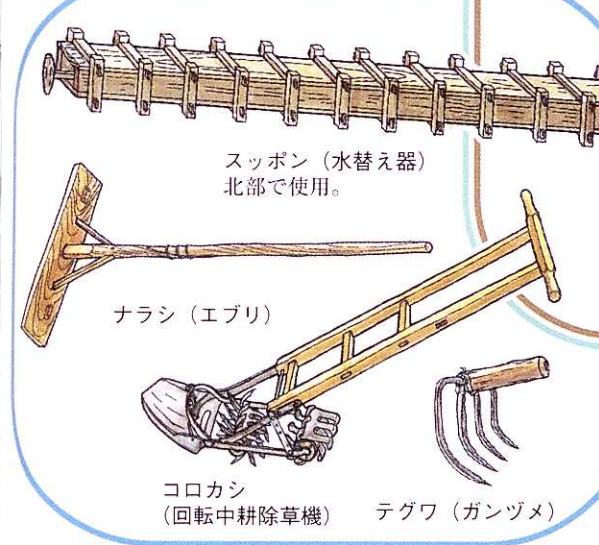
北部で使われた鍬の例



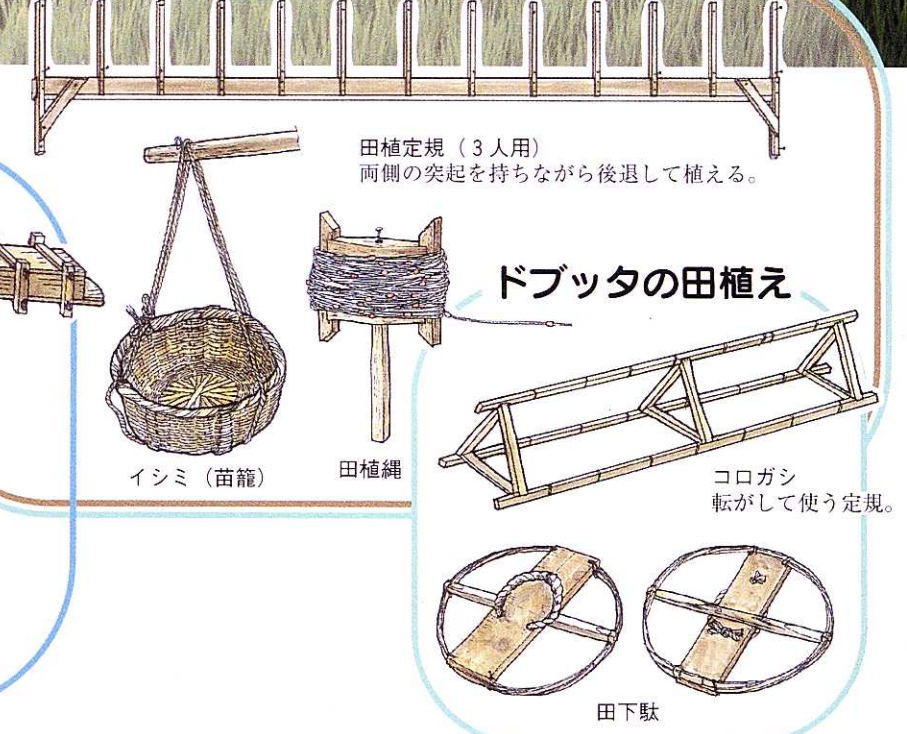
穀物を運び選別をする



水草土の管理をする



田植え

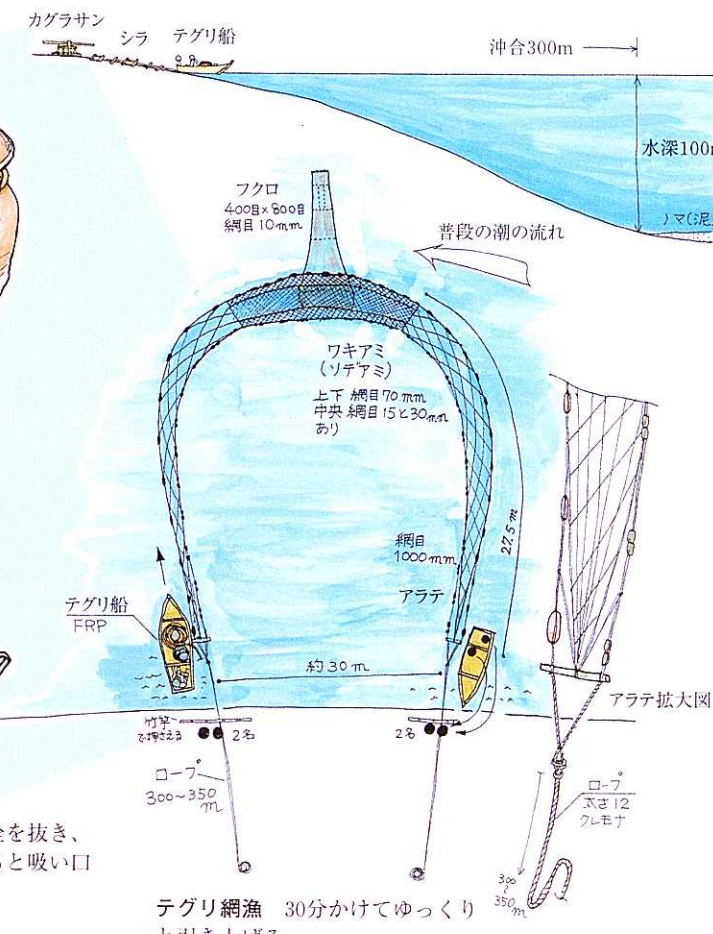


かつて浜の集落では、小漁や磯物採取など通年さまざま漁が行われてきた。岩場のない海岸線で行われたのは、シラスやイワシ、アジなど海面近くを泳ぐ魚を捕る地曳網漁である。また、急深の田尻から一色の地先ではアカエビ・サクラエビも行われる。底物のエビを捕るにはテグリという底曳きの小さな地曳網が用いられてきた。

船で小漁に出る時には、チゲ（道具箱）に釣針や仕掛け、糸、網繕いの道具を入れて持って行く。刺網漁、夜間操業のイカ釣りやサンマ漁、餌入りの籠や壺を海底に沈めて貝を捕るツボ（貝）漁やタコ漁、そして砂底の海で行う突き漁もある。

大崩から浜当目海岸にかけては、急峻な岩場や磯が続く岩礁地帯で、市域で唯一、海藻（おもにアラメ（和名サガラメ）やワカメ）や貝類などの磯物採取が行われる。ここにはアワビやサザエ、ナマコを捕る潜り（海士）が存在する。漁期以外は磯での海藻採りやその他の漁を営む。

一方、瀬戸川や栃山川などの河川や用水路で行われるセツショウ（川漁）の代表格は、やはりウナギ捕りである。マチアミ、ハリキリ、ズスコ、ウナギウゲ、ウナギカキなど実にさまざまな仕掛けがあり、魚と人間との知恵比べが展開する。

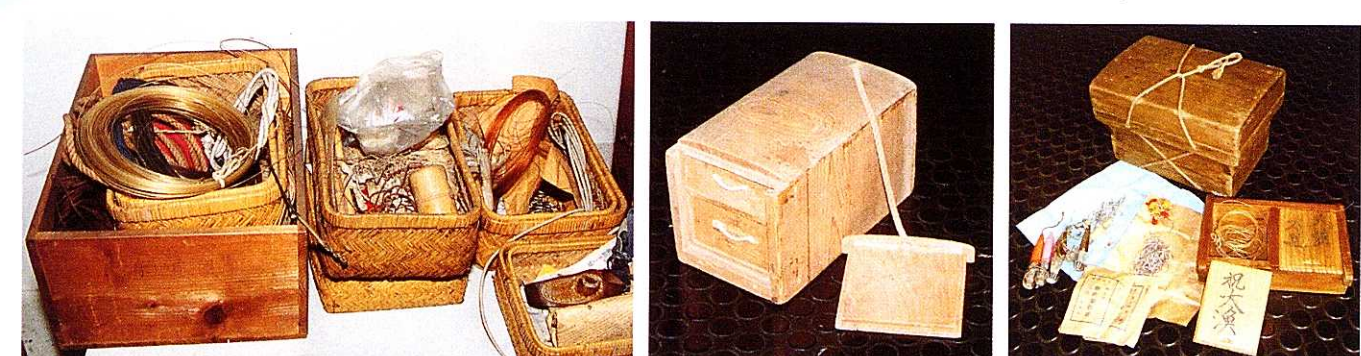


テグリ網漁 30分かけてゆっくりと引き上げる。



小漁の道具と弁当

釜師の弁当 小漁に出る時にはメンバに麦飯を詰め、スカリ（網袋）に入れて持って行った。



③行李 さまざまな小漁の道具が入られる。

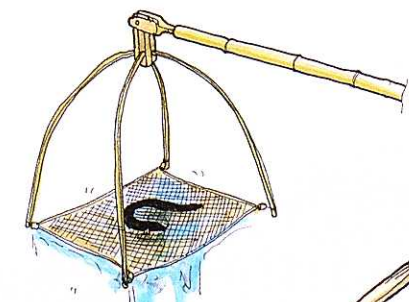
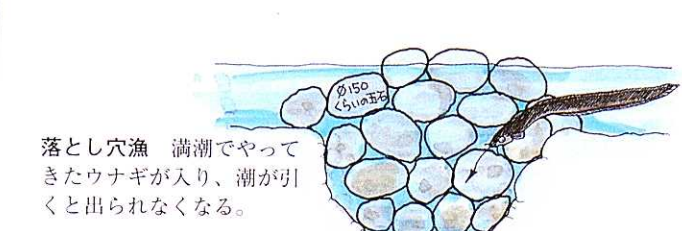
②マクラ釣箱 落とし蓋をすると紐が提げ手となる。  
①チゲ 中蓋に「大漁万足」「祝大漁」の願いを刻む。

マチアミ 秋時分、川を下るウナギを捕る。また雨で川が増水した時にもこの網を用いた。

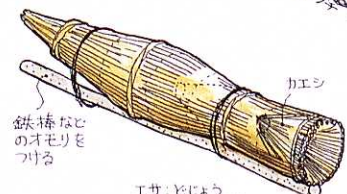
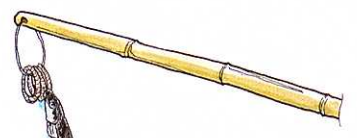


ブツタイ 用水路などで川底を足で踏んで脅かし、魚をこの網の中に追い込む。

ウナギ捕りの漁具

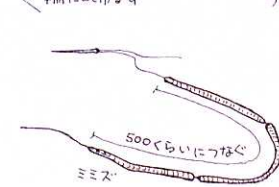


ウナギカキ

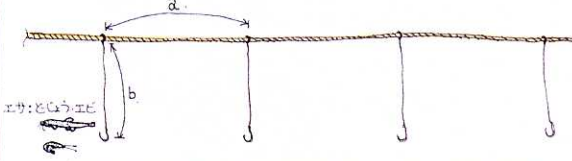


エサ: じょうみみズ(水)カワエビ

鉄棒などのオモリをつける

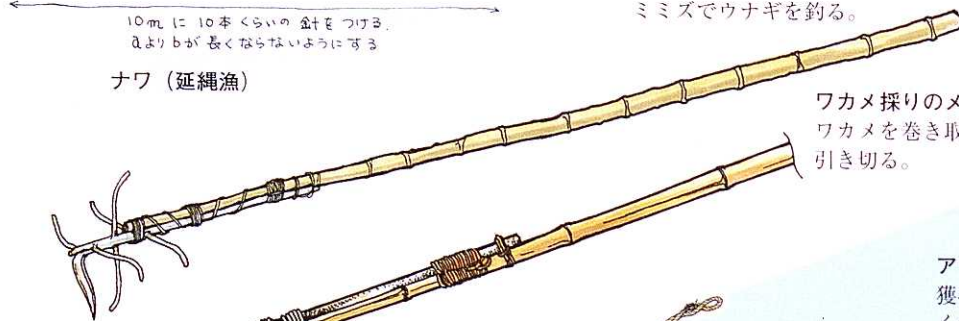


ズスコ (釣漁) ミミズでウナギを釣る。



ナワ (延縄漁)

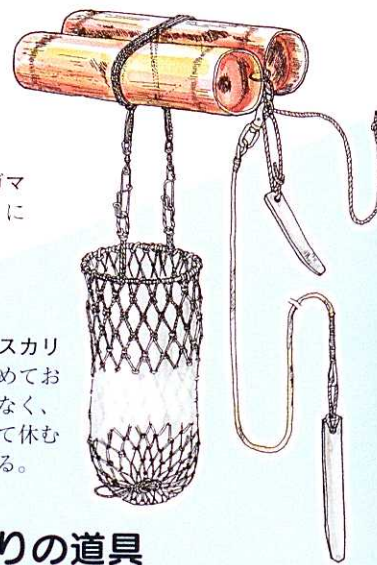
ワカメ採りのメカリガマ ワカメを巻き取るように引き切る。



アラメ採りのメカリガマ 刈った葉が手前に転んでくるので3本の針金で受けとめる。

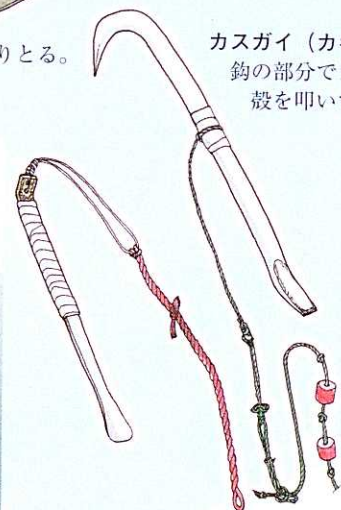
海藻採りと潜りの道具

アワビ用スカリ 獲物を貯めておくだけでなく、体をのせて休む場にもなる。



ヘラ アワビをこじりとる。

カスガイ (カキ用) 鉤の部分でカキの殻を叩いて砕く。



ヘラベッタのカギ (アワビ用)



ナマコ用スカリ ヘラを岩の間にはさんで流れないようにする。



④大崩海岸 先に見えるだけのこ岩までが浜当目分の磯物採取区域。

浜通り生業概観図

凡例

- 水産加工業（なまり節・鰹節・かまぼこ・はんべ・なると・伊達巻き・塩鯖・塩辛・佃煮など）
- 鮮魚商（仲買・行商など）
- 交通関係（運送業・タクシー・自転車店など）
- 漁業従事者（船元・船員・タンカーや運搬船操縦者も含む）
- 漁具・船具関係（船具・漁具・船舶灯・帆・籠・桶・潜水具・合羽・製氷など）
- 工業関係（船大工・船釘・大工（工務店）・建具・ブリキ・板金・鉄工・古鉄・土建・セメントなど）
- 一文菓子屋（駄菓子・かき氷・焼き芋・煙草など）
- 食材食品店（和菓子・青果・豆腐・惣菜・米穀・精米・酒・酒造・味噌・しょうゆ・仕込み・氷・飲料製造など）
- 飲食店（仕出屋・料理屋・旅館・寿司屋・そば屋など）
- 服飾関係業（仕立て・洋服・呉服・紺屋・足袋・はきもの・小間物）
- 生活必需品（燃料・金物・文具・薬・雑貨など）
- 銭湯
- 床屋・美容院
- 神官・法印・医者・産婆（助産婦）

表示の仕方

- 漁業を営み、さらに一文菓子屋を営んでいた場合
- 複数の商いの変遷がある場合
- 赤字とともに信仰にかかわる場所・寺社を示す

小路の名前

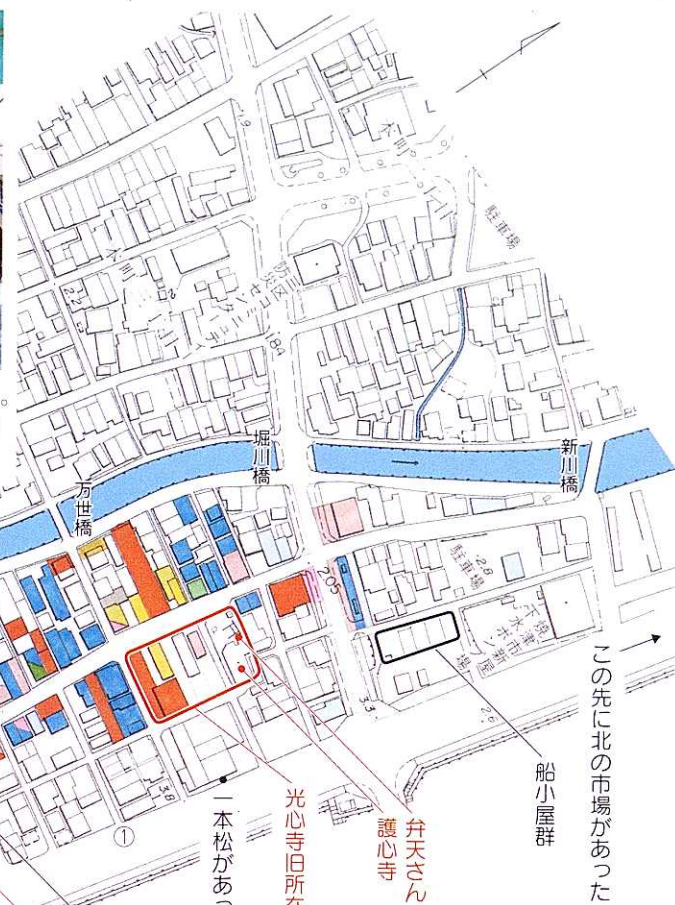
- ①ナンバン小路
- ②二文小路または広小路
- ③ナベヤの小路またはタローサンの小路
- ④イチエモンサンの小路
- ⑤マルニの小路
- ⑥エビス小路
- ⑦横町の広小路
- ⑧ゴテン小路
- ⑨角力小路
- ⑩ダンク小路
- ⑪会所小路
- ⑫川端小路
- ⑬サカトモ小路
- ⑭船元小路またはオテンキ小路または学校小路
- ⑮御休小路
- ⑯新八小路
- ⑰八右衛門小路
- ⑱大井戸小路
- ⑲楠屋小路
- ⑳甚五小路
- ㉑カジヤ小路



③鰹節製造 浜通りの半数を占めた水産加工業。カツオの生切り。（焼津市城之腰）



①仕込屋 船中での炊事や材料や穀類、日用品を扱う。これらを調達するのが若いカシキ（給仕係）の仕事である。（焼津市中港）



この先に北の市場があった



②竹材屋 カツオ一本釣魚を支えた竹竿は割れないように日影に保管する。旧港前に店を構える。（焼津市中港）



かつて焼津漁港築港以前は、砂利浜が河岸（港）であったので、大型船を沖に停泊させ、船で魚の水揚げや荷の積み降ろしをした。ハマを目前にした北浜通・城之腰・鯛ヶ島では、水揚げされた魚を利用した様々な産業が生まれ、三地区を南北に貫く「浜通り」を中心に、人やモノが行き交うマチへと発展した。

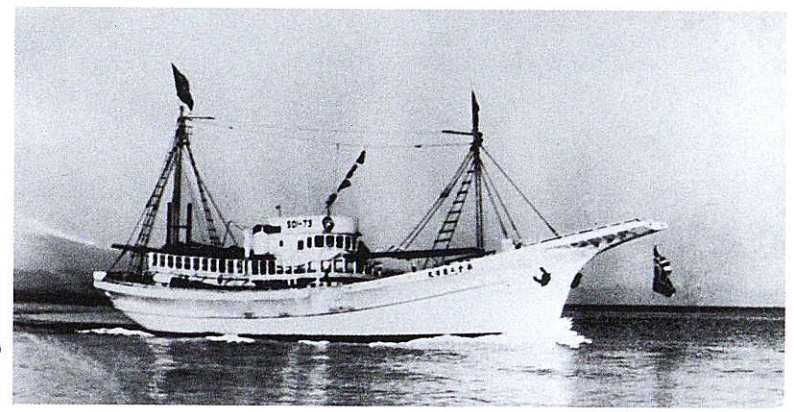
浜通りで営まれた業種の概要を表したものがこの地図である。その傾向として、通りのなかほどにサカナヤと呼ばれる水産加工業者が集中し、その両側に商店や鮮魚商、さらにその外側に漁師（船元や船員）の住まいが配置されている。とくにサカナヤは、春から秋までのカツオの漁期には、なまり節や鰹節を、そして正月を挟んだ冬場には、かまぼこ・なると・ハンベ（黒はんぺん）などの練製品を作り、素材の旬と季節の需要に巧みに対応した。また、住込みの節削り職人や帰港した船員たちが床場や銭湯でさっぱりとしてから、マチを流して遊びに出かける場所もあり、一文菓子屋などは小路ごとにあった。

釣具・船の設備・仕込屋などの漁業にかかわる商店は、港（旧港）建設により中港地区の周辺に移り、サカナヤは南の水産加工団地へ移る傾向にある。

図は昭和三〇年代に活躍した焼津のカツオ船「第二東洋丸」を復元したものである。東洋丸は一二五トのカツオ一本釣木造漁船で、一九五〇年（昭和二五）に清水の昭和造船で建造された（一九五八年、狩野川台風により八丈島で座礁）。この船に四五、六人が乗込み、四〜一〇月の漁期に、七〜一五日間かけて伊豆近海や小笠原諸島付近まで出かけた。この船は木造船としては最後のころのもので、この後、カツオ・マグロ兼用の鋼鉄船に交代し、大型化していく。

カツオ船の特徴は、まず船先から面舵（右舷）にかけて釣場が設けられていることである。船先をヤリダシ、脇はロカイという。ロカイには散水ホースが付く。

中央の甲板下には魚艙（ぎょそう）が仕切られ、一二〇ト級のカツオ船の場合、「三カメ（魚艙）、四ハラ（腹）、二ホータン（類）」という。これは中央縦一列に三艙、両脇に二つずつ四艙（または六艙）、前方左右にも一つずつ、合わせて九艙あることを表わしている。「三カメ」には船底に換水孔があり、海水を循環させ、餌のイワシを生かして運ぶ。餌を使い切ると栓をして排水し、今度は氷を入れてカツオの保冷庫となる。

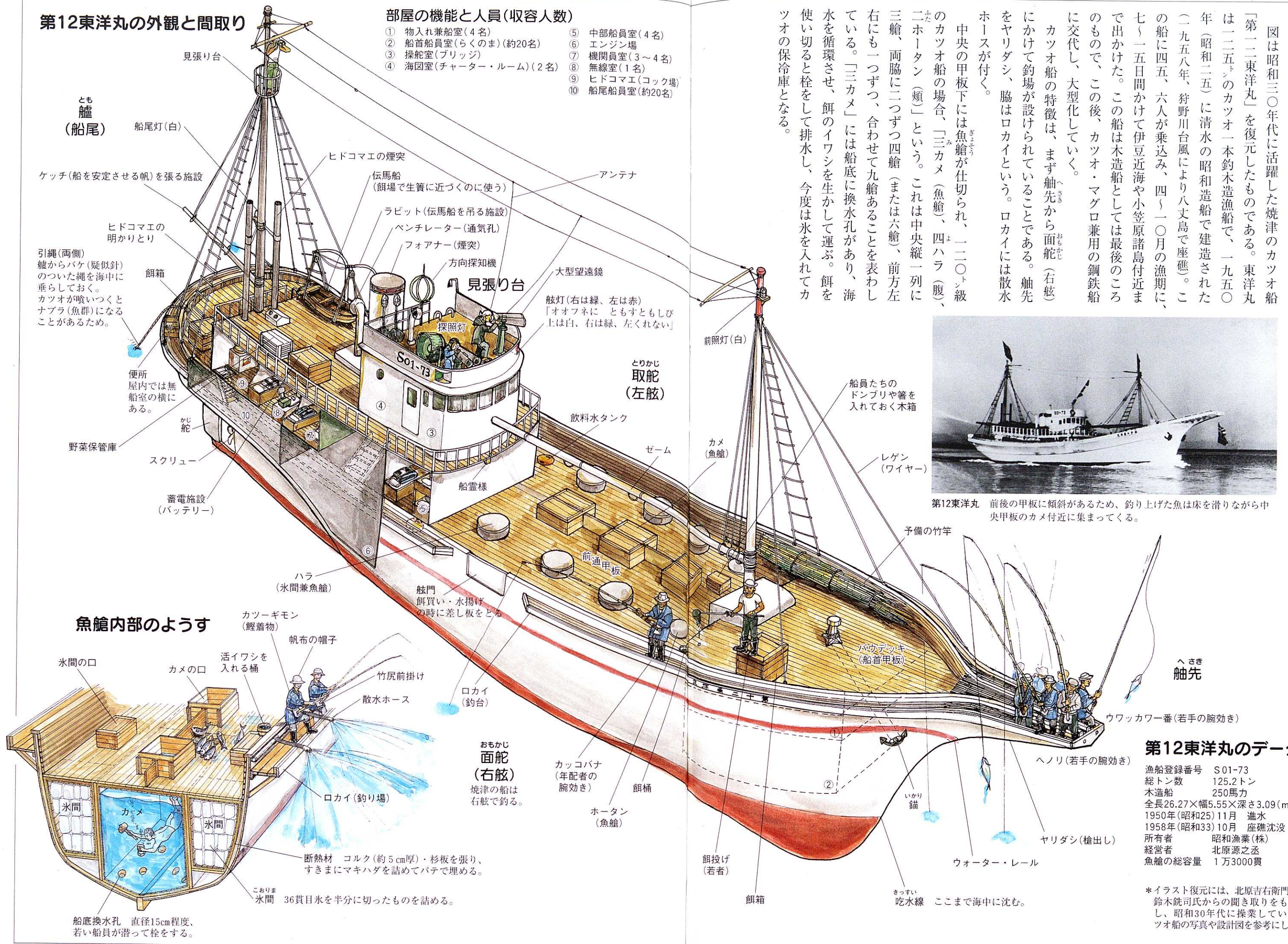


第12東洋丸 前後の甲板に傾斜があるため、釣り上げた魚は床を滑りながら中央甲板のカメ付近に集まってくる。

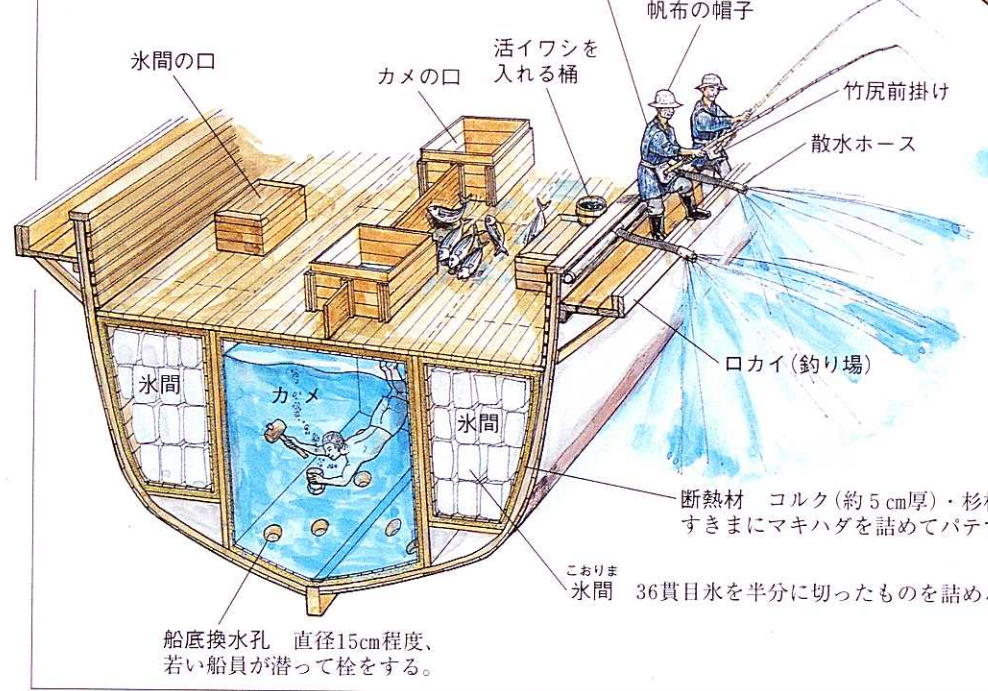
部屋の機能と人員(収容人数)

- ① 物入れ兼船室(4名)
- ② 船首船員室(らくのみ)(約20名)
- ③ 操舵室(ブリッジ)
- ④ 海図室(チャーター・ルーム)(2名)
- ⑤ 中部船員室(4名)
- ⑥ エンジン場
- ⑦ 機関員室(3〜4名)
- ⑧ 無線室(1名)
- ⑨ ヒドコマエ(コック場)
- ⑩ 船尾船員室(約20名)

第12東洋丸の外観と間取り



魚艙内部のようす



第12東洋丸のデータ

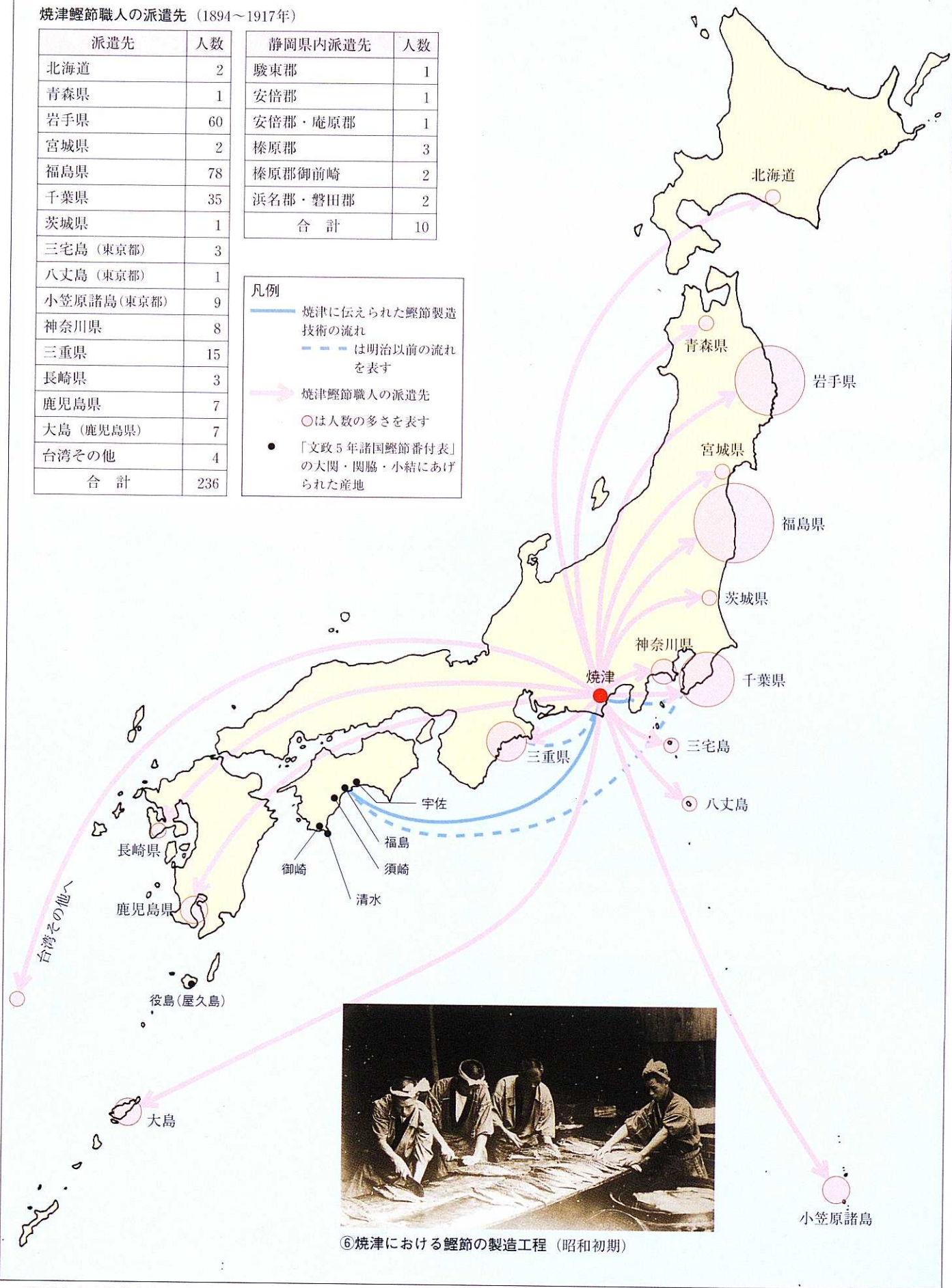
漁船登録番号 S01-73  
 総トン数 125.2トン  
 木造船 250馬力  
 全長26.27×幅5.55×深さ3.09(m)  
 1950年(昭和25)11月 進水  
 1958年(昭和33)10月 座礁沈没  
 所有者 昭和漁業(株)  
 経営者 北原源之丞  
 魚艙の総容量 1万3000貫

\*イラスト復元には、北原吉右衛門氏・鈴木銆司氏からの聞き取りをもとにし、昭和30年代に操業していたカツオ船の写真や設計図を参考にした。

焼津鯉節職人の派遣先 (1894~1917年)

派遣先	人数	静岡県内派遣先	人数
北海道	2	駿東郡	1
青森県	1	安倍郡	1
岩手県	60	安倍郡・庵原郡	1
宮城県	2	榛原郡	3
福島県	78	榛原郡御前崎	2
千葉県	35	浜名郡・磐田郡	2
茨城県	1	合計	10
三宅島 (東京都)	3		
八丈島 (東京都)	1		
小笠原諸島 (東京都)	9		
神奈川県	8		
三重県	15		
長崎県	3		
鹿児島県	7		
大島 (鹿児島県)	7		
台湾その他	4		
合計	236		

凡例  
 焼津に伝えられた鯉節製造技術の流れ  
 明治以前の流れを表す  
 焼津鯉節職人の派遣先  
 ○は人数の多さを表す  
 ●「文政5年諸国鯉節番付表」の大関・関脇・小結にあげられた産地



⑥ 焼津における鯉節の製造工程 (昭和初期)

\* 『焼津水産会沿革史』296~301頁より作成。

# 鯉節製造技術の発達と職人の交流

現代の鯉節製造技術の基本は、江戸時代に土佐の与市が安房(千葉県)で確立したという。それが伊豆の安良里に導入されて伊豆鯉節の基礎となり、さらに焼津にも伝わったと推定される。これとは別に「志摩国先志摩の初」が、土佐切りといわれる切り方を焼津に伝授したといわれているように、先進地であった伊勢(三重県)や土佐(高知県)の技術も入ってきた。ただし一八二二年(文政五)の鯉節番付では、焼津節はまだ前頭(まへがしら)の中心に甘んじている。

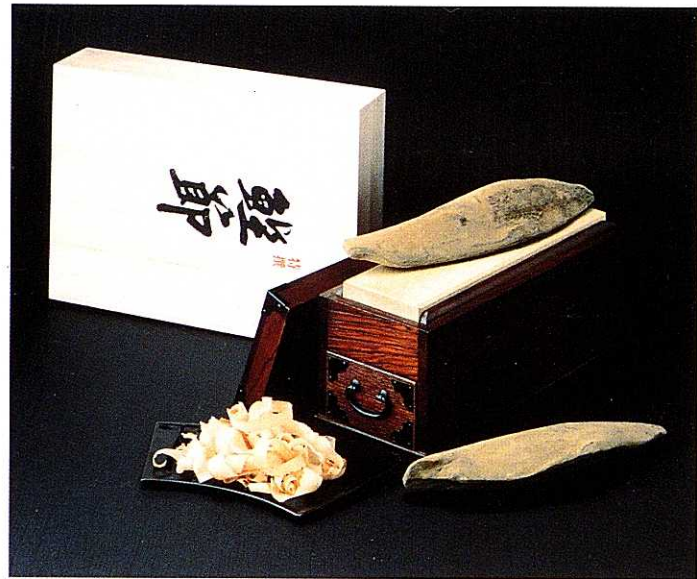
一八八九年(明治二二)に東海道線が開通すると、新鮮な魚と地の利を生かして水産加工業が急速に発展した。鯉節製造においても積極的に高知県などの先進技術を学んだ結果、早くも明治二〇年代末になると、焼津の鯉節職人が全国から技術指導に招かれるまでになった。一八九四年の村松善八をはじめとして、一九一七年までに、現地向いて技術指導をした焼津の職人は、延べ二四六人にのぼる。なかには地元産業に貢献したことを顕彰する石碑まで建立された人もいた。一方で製造業者は遠隔産地での技術指導を通じて製品の確保に努め、焼津には宮崎県や高知県から出稼ぎ職人を雇い入れた。良質の鯉節を作るため、黒潮に沿って活発な交流が行われていたことがよくわかる。



③ 鯉節の天日干し カビ付けと天日干しを4、5回繰り返したものが、本枯節としてもっとも高価な商品となる。



④ 鯉節の整形 鯉節の整形には形の美しさを追求するこだわりがあり、かつては専門の職人が手作業で行った。



① 本枯節と鯉節削り器



② 鯉節の樽詰め・出荷風景 (大正末~昭和初期頃) 樽は杉材に青竹のたがを用いた。

江戸時代に焼津湊といえ、年貢米や各地の産物を江戸に送るための廻船の拠点として知られていたが、港湾としての地理的条件に恵まれなかったため大型船は接岸できなかった。漁船も同様で、明治以降も漁獲物は浜に直接揚げ、その場で取引されていた。カツオは砂利浜に円形にまとめてセリにかけて水をかけて鮮度を保つのは登校前の小学生の仕事だった。遠洋漁業が盛んになってからも沖に停泊した船から解で運んだり、海岸までロープを渡し、それにマグロを結んで引き上げた。業者が浜でせり落としたカツオは、河岸揚げ小僧が天秤棒でかつぎ、堤防にかけて木の渡り板をたわませながら加工場に運んだ。力自慢なら一八〜一九貫目（七〇kg近く）を担いだというが、辛い仕事に逃げ出す者もいたという。接岸施設のない焼津漁港は、他県の乗組員からも水揚げが大変なところだといわれてきたが、戦後になってようやく岩壁が整備され、やがて東洋一といわれる広大な魚市場が完成した。魚市場を覆ったかまぼこ型の大屋根は世界に雄飛した焼津漁業のシンボルであったが、二〇〇七年（平成一九）に取り払われ、漁港の機能は南に整備された新港に移った。



④砂利浜に揚げられ取引を待つカツオ（佐藤道外画『明治大正 焼津町並往来絵図』巻二より）  
明治末期の様子。石堤の前、2町ほどの磯に市がたった。



⑤かつての焼津魚市場をのぞむ かまぼこ型の屋根は、焼津漁港のシンボルとして長い間人々に親しまれていた。



⑧焼津魚市場の様子（撮影年不明） 魚市場一面にマグロが並べられる。

⑦マグロの水揚げ 1970年（昭和45）、  
トンボマグロが豊漁であった。



⑥青空市場で取引される魚（1951年） 焼津魚市場が完成するまで、焼津漁港岩壁の周囲の埋立地に魚が並べられていた。



③機械化されたマグロの水揚げ

②解での水揚げ作業（大正末期）



①南浜の様子（昭和初期） 沖がかりのカツオ船と解。（焼津市鯛ヶ島）

